
愛と哀しみのラストショー

坂田火魯志

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

愛と哀しみのラストショー

【Nコード】

N9035A

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

夏の避暑地で暮らす少年。彼が出会った白い服の少女はそのまま少年と恋に落ちる。けれど少女は少年に嘘をついていた。その嘘が最後に。チェッカーズシリーズ第十一弾です。初期のバラードの名曲です。

第一章

愛と哀しみのラストショー

「馬鹿だね。泣くなよ」

俺は笑ってそう言った。あいつはそれでも泣くのを止めなかった。波音が遠くから聞こえてくる。俺はこの時駅に一人でいた。そして去っていく電車を見送っていた。

夢い思い出だった。一夏の。俺はこの夏恋に落ちてそして失恋した。ほんの一時の思い出だった。

俺は生まれた時からここに住んでいる。海辺にある避暑地だ。湖もあってその側で暮らしている。多分ずっとここで暮らしていくことだろう。

夏になればここは避暑にやって来た金持ちや観光客で賑わう。軽井沢みたいなものだ。俺の家もそうした金持ちや観光客を相手にして暮らしている。そしてあの時も俺は店で親の仕事を手伝っていた。夏休みがはじまったばかりで忙しくなってきた頃だった。俺は親に言われて店の前を掃除していた。その時目の前をあいつが通り掛かった。それがはじめてだった。

白いワンピースに白い帽子を被っていた。その後ろに見える青い空が白い服によく合っていた。あいつはそこで明るく笑っていた。まだ日に焼けていない白い顔で。明るく笑っていた。

その時はよくいる観光客の一人だと思った。夏になるとそうした格好の観光客で溢れ返る。だから一々そんなことに構ってはいられなかった。けれどその黒くて長い髪と大きな黒い瞳が印象的だった。まるで漫画に出て来るみたいなき感じだったのをよく覚えている。

それから二三日経って俺は海にいた。連れと一緒にいい女を探していた。

「誰かいないかな」

俺達はジーンズにシャツを着てサングラスをかけていた。ラフな

格好で好みの女を探していた。

見つけたら後は声をかけるだけだ。地元だから案内すると言ってそのまま仲良くなる。まあ地元に住んでいる特権だった。これで毎年いい思いもしている。

それでこの日もいい思いをするつもりだった。けれどそこであいつにまた会った。

「あつ」

あいつを見て思わず声を出しちゃった。サングラスの向こうに白いワンピースの水着のあいつがいた。海辺でもあいつは白だった。

「どうかしたのかよ」

連れは俺の声を聞いて声をかけてきた。

「急に声なんか出してよ」

「いや、何でもねえよ」

俺は咄嗟に誤魔化した。

「ちよつとな」

「可愛い娘ちゃんでも見つけたのかよ」

「馬鹿、そんなんじゃないよ」

俺は怒ったような声を出してまた誤魔化した。

「じゃあ何なんだよ」

「何でもねえよ」

そう言っただけで海辺から立ち去った。けれどあの姿が余計に目に入った。その日はそれが忘れられなかった。寝るまで海辺でのことと店の前でのことが頭の中で浮かびつぱなしだった。

次の日俺は店がはじまるまで湖の方へ行っただ。何か起きてもあの白い服が好きなのことが忘れられなかったからだ。何かぼんやりとした気持ちでどうにもいたたまれなかったからだ。

俺はそうした時や落ち込んだ時よく湖の方へ行っただ。そこへ行くとか落ち着くのだ。そして落ち込んだ気持ちも幾分ましになるからだ。

この時もそうだった。頭の中があのこと一杯でどうにもな

らない。そんな頭の中をましにしたかったのだ。俺は自転車で湖まで行った。

そこは周りが森に包まれた静かな場所だ。岸边には草が生い茂りボートも置かれている。ここでもとびきりのいい場所だ。観光客も殆ど来ない。だから俺は何かあつたらいつもここに来る。誰にも邪魔されたくはなかったからだ。

自転車から降りた。鍵だけ抜いてふらりと湖の方へ行く。岸の方へ行こうと思った。あそこが一番好きだからだ。

まだ日差しも強くなかった。朝の露が草に残ってきらきらと輝いていた。蜘蛛の巣の糸も露で銀色に光つてこの時ばかりは綺麗だ。森からは虫の鳴き声が静かに聴こえてくる。俺はその声を聴きながら岸に向かつて歩いていく。ボート乗り場のところまで行った。

するとそこにあいつがいた。最初に会った時と同じ白いワンピースに白い幅の広い帽子を被っていた。俺に背を向けて湖の方を見ていた。髪が風に微かに揺れ動いていた。

「またあいつか」

俺はそれを見て心の中で呟いた。

「これって何かの縁なのかな」

そう思わざるを得なかった。これで会ったのは三度目だからだ。

そして俺の心の中のものもやもやとしたものはまた大きくなった。ここに来ればそれが晴れると思つたのにとんだ見間違いだった。けれど同時にどういうわけか笑いたくなるものがあった。

「なあ」

俺は声をかけた。

「どうしたんだい、こんなところで」

あいつはそれに釣られて顔を俺の方に向けてきた。あの黒くて大きな目で俺を見ていた。

「こんな人気がない場所で」

「ちよつとね」

あいつは俺の言葉に応えてうつすらと笑った。

「久し振りにここに来たから」

「久し振り？」

俺はその言葉にふと興味を覚えた。

「前にもここに来たことがあったのかい？」

「ええ、子供の頃に」

あいつは湖の方へ顔を戻して俺に言った。

「もう。殆ど覚えていないけれど」

「そうだったのか」

旅行か避暑で来たのだろうと思った。ここに来る奴は皆そうだからだ。

「で、覚えている限りじゃどうなんだい？」

俺は尋ねた。

「変わったかい？」

「いえ、全然」

首を横に振ってそれを否定した。

「子供の頃だったから殆ど覚えていないけれど」

そう断ったうえで言う。

「覚えているのと全然変わらないわ」

「まあそうだろうな」

俺はその言葉に頷いた。

「ここはな。昔から全然変わっちゃいねえよ」

「そうなの」

「ペンションがあつて喫茶店があつて」

俺は言った。

「海があつて。そしてこの湖があつてな」

何も変わっちゃいない。俺が生まれた時からずっとこうした姿だ。

夏は人が多いがそれでも静かな避暑地だ。

「何も変わりはないさ。ずっとな」

「だからボートもあるのね」

「まあな」

ボートも。昔からあった。

「そのままさ。ずっとな」

「そうみたいん。よかったわ」

「よかった？」

「久し振りにここに来たから」

そしてまたこう言った。

「変わってなくて。嬉しいの」

「そうか」

何かそう思うのが不思議に思えた。俺にとつちやどうでもいいことだからだ。ここが変わっても変わらなくても家の商売が傾かなければそれでよかった。そうしたところは親父やお袋と同じ考えだった。

「今度ここに来る時は」

「今度は？」

「ううん、何でもないの」

どういうわけかここでまた首を横に振った。その理由はこの時はわからなかった。それから徐々にわかってきたことだった。

第二章

「何でも。ところで貴方この人なの？」

「ああ」

俺は素直にそれに答えた。

「ずっとな。ここで親が店やってるんだ」

「そうなの」

「学校もこの学校さ。今は休みだけれどな」

「そうよね。私も」

こいつもそれに答えた。

「大学の。最後の夏休みの」

「だったら俺と同じか」

同じ歳らしい。俺も今年で大学を卒業だ。卒業したら家業を継ぐことになってる。やることは結局変わりなしねえ。ここでずっと店をやるのが俺の人生なんだと思っている。

「貴方もそうなの」

「ああ。けれど俺はずっとここにいてるけどな」

「私は。一夏だけ」

笑いながら言った。

「ここにいてるわ」

「遊びに来たんだな」

「そうよ。少しの間だけね」

「それじゃその間さ」

この時こう言わなかったら何もなかっただろう。俺のもやもやとした気持ちはそのままだったかも知れないが。それでも何もなかったと思う。

「一緒に遊ばないか」

「一緒に？」

「このこと殆ど覚えていないんだろう？」

「ええ」

帽子を被ったままくりと頷いた。

「本当に。何処に何があるのか殆ど」

「ここにはどうして来たんだい？」

「たまたま。歩いていて」

どうやら俺とここで会ったのは偶然だったらしい。前の二回も完全に偶然だった。俺達は偶然三回も会ってしまった。本当に何かの縁だと思えなかった。

けれどそれがかえってよかった。俺にしても何か気が楽だった。

俺は軽い調子でまた声をかけた。

「ボートにでも乗る？」

「ええ」

彼女は頷いた。

「よかつたら」

「それじゃあ乗ろうぜ」

そのまま乗り場の方へ案内していく。もう歳をとった爺さんが座ってそこで待っている。ボートが何艘か並んでいた。

爺さんに小銭を渡して先頭にあったボートに二人で乗る。俺達は向かい合って座った。彼女は座ると帽子をとって自分の膝の上に置いた。

俺は漕ぎはじめた。そしてゆっくりと岸边から離れていく。そのまま湖の真ん中へと進んでいく。

「広い湖ね」

彼女は周りを見渡しながら言った。まだ朝もやが残っている。

「こここの隠れた名所なのさ」

俺は笑ってこう応えた。

「観光客はあまり来ないけれどな」

「そうなの」

「皆海や店に行っちゃまうから」

「そっちの方が賑やかだからね」

「ああ。けれどどうした場所もあるんだ」

俺はボートを漕ぎ続けながら言った。

「静かに楽しめる場所もな。これは覚えてないかな」

「ええ」

彼女は申し訳なさそうに答えた。

「悪いけれど」

「別に悪くなんかないさ」

俺はそう返してフォローした。

「忘れてたんならな」

「有り難う」

彼女はその言葉に礼を言ってくれた。

「そう言ってもらえると気が楽になるわ」

「そうかい」

「この夏はここでゆっくりとしたいから。少しずつ思い出していくわ」

「それがいいだろうな」

俺はここでボートの縁に刻まれた傷に目がいった。

「おや」

「どうしたの？」

それに彼女も顔を向けてきた。

「いや、これな」

俺はその傷を指し示して言った。

「どっかの馬鹿が付けた傷だよ」

「傷？」

「ああ。何か書いてあるな」

俺は漕ぐのを止めて縁を見てみた。そこにはまた臭い文字が書かれていた。

「俺達はずっと一緒だったさ」

俺は読みながら思わず笑ってしまった。

「また臭い言葉だよな」

「ずっと一緒って」

「どうせどつかの馬鹿が得意になって刻み込んだらうさ。彼女と一緒にいて」

「彼女と」

「ここじゃよくあることなんだよ」

俺は説明した。ここは避暑地だから夏のちよつとした遊びに来るカップルも多い。それでこうした馬鹿なことをする奴もいる。それがこれだった。

「よくあることなんだ」

俺はまた言った。

「俺達地元の人間にとっちや迷惑だけれどね」

「そうなの」

「ああ。まあ慣れたけれどね」

それは本当だった。俺も子供の頃からこんな落書きとかを一杯見てきた。慣れるのも当然だった。

「けれど。何か」

「何だい？」

俺は彼女に尋ねた。

「地元の人の前でこんなこと言っていていいかどうかわからないけれど」

「ああ」

「悪い気はしないわ。見ていて」

「俺も慣れてるけれどね」

また言った。

「けれどな。何か」

それでも俺は言いそうだった。けれどそれは途中で止めた。

「いや、いや」

急に言いたくなくなった。

「どうでもな」

「そうなの」

「まあこんな馬鹿な落書きなんて忘れてこの湖を見ていこうよ」

俺はこう提案した。

「そっちの方がいいしさ」

「ええ」

けれどその落書きのことは頭に残った。そして俺達のこととそれを自然と重ね合わせた。

それが凄く自然に思えた。不自然な筈なのに。俺は段々それがわからなくなってきた。けれど悪い気はやっぱりしなかった。もやもやとした気持ちが自然にすっきりとして穏やかで、それなのに温かい気持ちになっていくのがわかった。それが本当に自然だった。

第三章

それから俺達は毎日みたいに会うようになった。俺の店に来るときもあれば教えてもらった彼女の白い別荘まで。そこは本当に俺なんかとは住んでいる世界が違う大きな別荘だった。こうした別荘も昔から見ているがそれでも驚いた。まさかこんな別荘を持っている女の子と付き合うなんて夢にも思わなかったからだ。

「いらっしやい」

彼女は俺を別荘の中に案内するとあの白い服で出迎えてくれた。

笑顔も白くて夏の日差しよりも明るかった。

「あ、ああ」

俺はその別荘に来て凄く戸惑っていた。

「何か。凄い別荘だね」

辺りをキョロキョロと見回しながら言う。

「驚いた？」

「まあな」

俺は素直に答えた。

「こんな凄い別荘にいるとは正直思ってたから」

「言ったのに」

「けれどさ」

それでも驚くものは驚くものだ。

「実際に見てみるとよ」

「驚くことないのに」

彼女は優しく微笑んでこう言った。

「今は私の家なんだから」

「君の？」

「ええ、この夏だけはね」

彼女は言った。

「私の家なの」

「そうなんだ」

「そして私の家であるのはこの夏だけなの」

「どうしてなんだい？」

「うん、ちよっとね」

ここで彼女は何かを言おうとした。けれどそれを止めてしまった。

「いえ、何でもないわ」

「何だよ、つれないな」

「御免なさい。それよりあがる？」

「よかつたら」

「それじゃあばあやにお茶を入れてもらうから。リビングに行きましよう」

ばあやときたものだ。どうやら本当にお嬢様らしい。少なくとも俺なんかとじゃ住んでいる世界が全然違う。そうした人は一杯見えてきたがこうして付き合うのは本当にはじめてだった。だから余計に戸惑った。

リビングに案内してもらうところもまた白くて綺麗な部屋だった。外も白くて綺麗だったけれどここもそれは同じだった。何か本当に別世界にいるようだった。

俺は何か居心地が悪くなってきた。俺みたいなのがいる世界じゃないと思っただからだ。けれど彼女はそんな俺ににこりと笑って言うてくれた。

「お菓子も出すわね」

「あ、ああ」

出て来たのはケーキだった。生クリームに苺やオレンジを飾ったまた女の子らしいケーキだった。ケーキが出て来たところでそのばあやさんがお茶を持って来てくれた。

「どうぞ」

出されたのは紅茶だった。そして同時に熱いミルクもあった。

「ロイヤルミルクティーだね」

「ええ」

これはわかった。俺の家は喫茶店だ。だからこのロイヤルミルクティーも知っていた。何から何まで白かった。夏の暑い日差しも空気も涼しく感じられる程だった。

飲んでみた。俺の店で出すのよりもずっと美味かった。ケーキもだ。素材がいただけじゃない。作り方も煎れ方もせいじょそこいらのなんて比べ物にならない程だった。

「どうかしら」

「いや、これは」

正直喫茶店の人間としちゃ複雑な気持ちだった。

「美味しいよ」

けれど素直にこう答えた。ここまでいいケーキや紅茶なんてそうはないからだ。悔しいがそれは認めるしかなかった。

「とても」

「そう、よかつたわ」

彼女はそれを聞いて顔をほころばせた。

「喫茶店の人だから。何て言われるかわからなかったのよ」

「うちの店のより美味しいよ」

俺は言った。

「こんな紅茶もケーキもそうそうないから」

「そうかしら」

「そうだよ」

俺はまた言った。

「ここまで美味しいのは。そうはないよ」

「ふうん」

だが彼女はそれがよくわかっていないようだった。

「そうかしら」

「舌が慣れてるのかな」

俺はそう思った。

「だから。案外わからないのかも」

「私はそうは思わないけれど」

けれど人間なんてのは自分のことは案外わからないものだ。彼女もそうかも知れない。

「けれど嬉しいわ。うちのお茶やケーキが美味しいって言うてくれて」

「それはどうも」

「飲んで。まだあるから」

「うん」

俺達はお茶とケーキ、そしておしゃべりを楽しんだ。本当に何か違和感があったけれどそれも次第になくなってきた。そういうことが何回かこの別荘でも俺の店でもあった。俺達はどんどん親密になつていた。

「なあ」

俺は浜辺で遊んでいた時に彼女に言った。

「来年もここに来るかな」

「それは」

彼女はそれを言われると一瞬戸惑った顔を見せた。

「どうかな。何なら俺の方からそっちに行くけれど」

俺はさらに言葉を続けた。

「またさ。一緒にいようよ」

「この夏だけじゃなくて？」

「そうさ」

俺は答えた。

「また来てくれよ。それかずっとここに」

「ええ」

けれどそれに答える彼女の顔は何処か寂しげだった。

第四章

「いてくれないかな」

「よかつたら」

彼女は力ない声で答えた。

「ずっと一緒にいたいけれど」

「実際はそうはいかないよな」

「ええ」

「ここは避暑地だから。夏が終われば皆出て行くしな」

それが現実だった。それは俺にもわかってる。けれどそれでも夢は見たいものだ。この時の俺がそうだった。一夏でもいい、夢を見ていられるのなら。それでよかつた。けれど現実ってやつは俺が思っていたよりずっと冷たくて残酷なものだった。

「まあ、そうはいかないものだよな」

「そうなのよね」

彼女は力ない声で頷いた。

「どうしてもね」

「そうだよな。本当にどうにかならないものかね」

俺もこう思った。

「それでもさ。一緒にいようぜ」

俺は言った。

「いいかな、それで」

「え、ええ」

ここで俺は彼女の様子に気付くべきだった。そうすればあんなことにはならなかったからだ。今更言ってもどうしようもないことだとしてまだ。

「とりあえず夏だけはね」

彼女は俺に顔を向けて言った。

「一緒にいましょう」

「ああ」

こうして俺達は二人きりの夏を過ごした。他には何もいらなかった。ただ彼女だけがいればよかった。本当に二人だけで充分だった。彼女さえいれば。

砂浜も湖も海も森も。全てが俺達と一緒にだった。楽しい夏だった。そこには青春があった。

俺は今まで青春なんて感じたこともなかった。夏になれば店を手伝い、それ以外はただ漠然として学校に通っていた。それだけだった。その味気ない日々が彼女が来てくれた。はじめて青春ってやつを知った。嬉しかった。俺はずっとこうしていたかった。

けれど青春ってやつは夢に似ていると誰かに聞いた言葉をここで思い出すことになった。夏が終わりそうになるその時だった。彼女に家に行くと言紙がポストに入っていた。

俺はそれはとりあえずはチラリと見ただけだった。他人の手紙なんて見るもんじゃない。余計なトラブルを抱える羽目になりかねない。だから俺はその手紙はそのまま素通りした。そして彼女の家に入った。余計なこととは言わず彼女自身にその手紙のことを伝えた。

「手紙が来てるぜ」

「手紙が？」

「ああ。早く読んだ方がいいんじゃないかねえかな」

「まさか」

「まさか!？」

俺は彼女の言葉に妙な感触を感じた。

(何かあるのか)

心の中でそう思ったが口には出さなかった。そのまま手紙を取りに行く彼女を見送った。

彼女はすぐに戻って来た。そわそわした様子が今度は沈んだ様子になっていた。それを見ると俺は何かあると思った。

「何の手紙だったんだい？」

「両親から」

彼女は答えた。 50

「この夏の後のことだ」

「戻ってからのことかよ」

「御免なさい」

彼女はそこまで言って急に俺に対して謝った。

「どうしたんだよ、一体」

「もうここには来れないの」

今にも泣きそうな顔でこう言った。

「来れないって」

「ここに来るのは私じゃなくなるから」

「訳のわからないこと言うな」

それがどういう意味なのか本当にわからなかった。

「どうということなんだよ、それって」

「話せないの。けれど」

泣きそうな顔のまま言う。その時の顔は今でも覚えている。

「この夏で。いいえ、今別れましょう」

「別れるってよ」

俺はさらに訳がわからなくなった。

「何言ってるんだよ、急に」

「さよなら」

けれど彼女は俺の言葉を遮ってこう言った。

「楽しかったわ。けれど」

「さよならっておい」

「今まで一緒にいてくれて有り難う、けれどももう」

「終わりなのかよ、それで」

「御免なさい」

彼女はその目につっすらと涙を浮かべていた。何か俺が悪者みたいな気になってきた。

こんな目をされちゃもう俺にはどうすることもできなかった。観念した。俺もその言葉を受け入れることにした。

「わかったよ」

俺は言った。

「じゃあこれでお別れだな。じゃあな」

「ええ」

もう俺に顔を向けはしなかった。顔を背けて答える。

俺はそこからは何も言わなかった。無言で彼女の別荘を出た。そのまま家へと帰って行った。どうにも腑に落ちるものじゃなかったがそれで納得するしかなかった。悔しいが認めるしかなかった。

急に夏が終わった気がした。空も海もまだ青いのには俺の夏は終わった。そう思うしかなかった。俺はそれからまたいつもの夏に戻った。店を手伝って適当に遊ぶ。そうして気ままに生きることにした。どうせあれは夢だったんだ、そう思って自分で納得することにした。けれどそんな俺の耳にふとあることが耳に入ってきた。

「ねえ聞いた？」

店の使いで道を歩いている時に地元の女子高生の話がふと耳に入った。部活か何かの帰りだったのだろう。夏休みだつてのに制服を着ていた。白いカッターとチェックのミニスカートから見える脚が日の光を跳ね返してやけにまぶしかった。

「あそこの白い別荘だけねどね」

(白い別荘！？) 92

俺はそれを聞いてまさかと思った。

「あそこにお嬢さんがいるよね」

「ああ、あの黒い髪の綺麗な人ね」

俺はそれを聞いて間違いないと思った。そして耳を凝らした。

「何でも結婚するらしいよ」

「へえ、そうなんだ」

(嘘だろ)

何とか表には出さなかったが動揺した。すぐには信じられない話だった。

第五章

「この夏が終わったらすぐに。それでもうすぐここから帰っちゃうんだってさ」

「そうなんだ」

「本当はずっと後で結婚する筈だったけれど向こうの事情があるらしくて」

「お金持ちの家だからね。許婚とかそんなのなのかな」

「多分ね。いいところのお嬢様らしいから」

「お嬢様つてのも大変よね」

「まああたし達にはお金を落としてくれるいい人達だけけどね」

「あはは、確かに」

そこまで聞いて俺には大体の事情がわかった。だからあの時彼女は急に態度が変わったのだ。動揺して。急に別れ話を切り出したのもそれでわかった。

「今日にもここを出るらしいよ」

「また急ね」

「あたしもそう思うけれどね。まあそういう事情なんじゃないかな」俺はすぐに店の使いを終えた。それが終わるとその足で駅に向かった。自転車でありったけ飛ばして駅に向かった。線路が二本、プラットホームは一つの小さい駅だ。通る電車も少ない。けれどこの時ばかりはその電車が来ないことを祈った。いつもは何時来るんだと舌打ちばかりしているホームなのに。俺は向かった。

駅に着いた。自転車はそこいらに置いて駅の中に入った。そこには彼女がいた。

「どうしてここに」

俺の姿を認めて驚いた顔をしていた。あの白い服と帽子にトランクを持っていた。今にも去ろうとする姿だった。

「話を聞いたよ」

俺は笑みを浮かべて彼女に言った。けれどその笑みはきつと寂しい笑みだったと思う。自分ではわかりはしない。

「結婚するんだってね」

「ええ」

彼女は俯いた。そして小さい声で答えた。

「それもすぐに」

「そうよ」

それにも答えた。駅には俺達の他は誰もいなかった。また二人だけの世界に戻れた。けれどその世界は今すぐにも終わろうとしているのはわかっていた。それを感じながら話をした。

「本当は。ずっとこれからのことだったのに」

「許婚なんだってね」

「ええ」

彼女はまた答えた。

「それ、俺に隠していたんだ」

「御免なさい」

「名前、変わるから。だから君じゃなくなるんだね」

「今の私は。もういなくなるから」

彼女は言った。

「結婚するからだね」

「そうよ」

その声が段々濡れたものになってきているのがわかった。

「この夏が終わったら。すぐにね」

「それまでの最後の思い出の為にここに来たんだ」

「そのつもりだったけれど」

彼女は俯いたままだった。けれどその言葉はよく聞こえた。

「貴方に出会って」

泣きだした。俺はそんな彼女にこう言ったのだ。

「馬鹿だね、泣くなよ」

泣くことなんてなかったからだ。

「どんなことだつてさ、終わりがあるんだ」

俺だつて辛くないと言えは嘘になる。けれどこの時はそんなことは我慢して言った。

「だからさ、気にすることなんてないさ」

「優しいのね」

彼女は俺の言葉を聞いてその顔を少しあげた。

「騙してたのに」

「騙していたりなんかしてないじゃないか」

これは慰めじゃなかった。俺の本音だった。

「隠していたのと騙していたのは違うよ」

「違うの？」

「そうだ。誰だつてさ、言えないことはあるんだ」

この時それがわかった。それがわかったら何もかも終わるってことも。

「だからさ、気にすることはないんだ」

「有り難う」

俺の言葉に礼を言った。

「私なんか。そんなこと言ってくれて」

「もうここには来ないんだろう？」

「ええ」

彼女は答えた。

「どちらにしろ。ここに来るのはこれで最後にするつもりだったから」

「そうか、じゃあこれでお別れだね」

「そうね」

まだ濡れたままの目でこう言った。

「これで。永遠にさようならね」

「ああ」

俺は彼女のその言葉に頷いた。その時後ろから電車が来た。

「これで。何もかもね」

「そうね。夏ももう」

電車は俺達の横で止まった。扉が左右にゆっくりと開く。

「これに。乗るんだよね」

「そうよ」

彼女は電車に足を向けた。静かに片足をそこに踏み入れた。踏み入れたところで俺に顔を向けてきた。ゆっくりと声をかけてきた。

「さようなら」

「さようなら」

俺もそれに応えて挨拶をした。

「ずっとな」

「ええ、ずっと」

俺達は最後に見詰め合った。出発を知らせるベルが鳴った。彼女はその中に入った。

扉がゆっくりと閉まった。そして海から離れはじめる。俺はその電車をゆっくりと眺めていた。

もう終わったと思った。この電車が消えれば俺の恋も青春も全部終わりだ。本当に一夏限りの夢だった。そうなる筈だった。彼女が出て来るまでは。

彼女が出て来た。窓から顔を出して。白いハンカチで俺に別れの手を振っていた。

「あいつ……」

不意に俺の方が泣き出してしまった。泣かずにはいらなかった。俺は泣きながら彼女に手を振った。最後の別れの為に。

そのままお互い手を振り合った。電車が消えるまで。消えてからも俺は暫く手を振っていた。

振り終わった時俺はわかった。もうこの恋も青春も一夏限りの夢じゃなくなったことに。

俺の一生の思い出になった。辛いけれど、心地良い思い出に。俺みたいな奴でも恋や青春を味わうことが出来た。たった一人の女の人を心から愛せた。それを始めて知った。愛と哀しみをそこに一

緒に含んで。今そのラストショーが終わった。電車は消えた。そして彼女も。けれどそのラストショーは俺の心の中に永遠に残る。甘さと辛さを一緒にたにして。

愛と哀しみのラストショー

完

2006・3・16

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9035a/>

愛と哀しみのラストショー

2009年6月15日21時59分発行